

制作工程模型展示

# 国宝 紅白芙蓉図ができるまで

## — 東洋絵画の絵具の秘密 —

平成 24 年 5 月 15 日 (火) ~

本館 1 階 20 室 みどりのライオン



東洋絵画はどのような絵具で描かれているかご存知ですか？絵具といってもチューブに入っているような絵具ではありません。古代から現代に至るまで、鉱物・植物・動物・昆虫など、自然界にある様々な材料を加工して使われてきました。原材料が異なるため、加工された絵具もその色調や使い勝手は全て異なります。これらの様々な材料の特色を巧みに活かした描き方の一例をご紹介します。



国宝 紅白芙蓉図 李迪筆  
南宋時代・慶元 3 年 (1197)

モデルとなった作品は、中国・南宋時代・慶元 3(1197)に宮廷画家の李迪によって描かれた国宝「紅白芙蓉図」のうち、ピンク色の花が描かれた一幅です。制作の順を追って忠実に再現したこの模型を通して、作品がどのように仕上がってゆくか説明します。

また、今回は材料の特徴を説明するために 2 つの異なる材料で彩色を再現しました。材料別に描き分けられた作品を見比べることで、東洋絵画の絵具の種類の多様さについてご理解を深めていただければ幸いです。

この制作工程模型は、東京芸術大学大学院美術研究科 文化財保存学専攻 保存修復日本画研究室、同芸術学科 日本・東洋美術史研究室の協力を得て東京芸術大学学生ボランティアの大学院生が作成しました。

平成 23 年度・平成 24 年度 東京芸術大学学生ボランティア (制作工程模型班) : 石井 恭子 (敬称略)

### ギャラリートーク「国宝紅白芙蓉図ができるまで — 東洋絵画の絵具の秘密 —」のご案内

制作工程模型を作成した学生ボランティアによる展示解説です。

日時：6 月 6 日 (水)、20 日 (水)、7 月 7 日 (土)

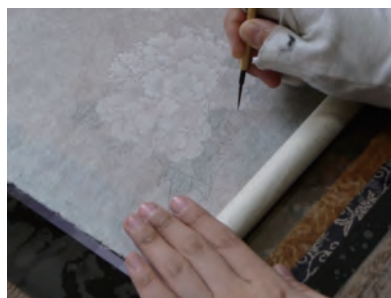
15 : 30 ~ 15 : 50

解説場所：本館 2 0 室 みどりのライオン

集合場所：本館 1 階エントランス



礬水でにじみ止め



白描

工程

1

はく びょう  
白 描

本画の基となる線描を、紙に墨で描きます。今回は原寸大の写真を下絵として使用し、膠と明礬の礬水でにじみ止めをした薄美濃紙（楮を原料とした薄い和紙）に上げ写しという摸写に用いられる手法で描きました。このように線だけを抜き出して描くことで、制作当初に描かれた花弁のひだや葉の葉脈などの繊細な線描の様子が分かります。

工程

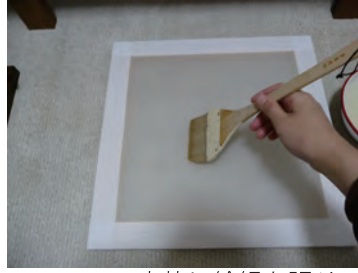
2

## 絹上げ

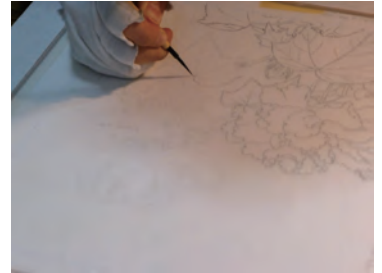
木枠に生麩糊をつけ、絵を描く画面となる絵絹をピンと伸ばして張ります。

糊が乾いたら、礬水を塗ってにじみ止めをします。このように枠に張り込むことで、やわらかい布帛にも絵が描きやすくなります。

木枠に張った絵絹の下に白描を置き、絵絹の下から透けて見える線描を墨で写します。



木枠に絵絹を張り再び礬水を引く



絹上げ

彩色例

1

## 染料を用いた彩色例

独特の色彩と、混色できることが染料の特徴です。葉の部分に見られるように、藍（青色の植物性染料）と藤黄（黄色の植物性染料）を混ぜることで、青味の緑から黄色味の緑まで自由に作ることができます。花部分に見られるように、絵具を水で薄めて描くことも容易です。

絵具が透明なので、乾燥すると絵と絵絹の後ろが透けて見えます。



染料を溶いたもの



染料を塗り重ねた様子

彩色例

2

## 顔料を用いた彩色例

鉱物を原料とする絵具は、原料によって色が決まっています。細かく砕いた原料の粒子の乱反射の違いから、色調に濃淡があるように見えます。原料によって比重も異なるので、自由に混色できないものもあります。葉部分に見られるような緑色の濃淡は、絵具の粒子の大きさを使い分けることで表現します。花部分に見られるように、鉛白や朱は混色が可能なのでピンク色の濃淡をつけることができます。

絵具が不透明なので、乾燥すると絵が背景から浮き上がるように見えます。



顔料を溶いたもの



顔料を塗り重ねた様子

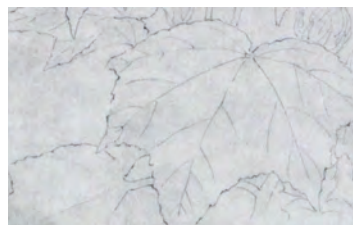
工程

3

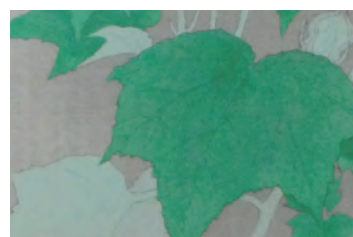
## 彩色

今回は科学調査の結果を基に、葉の部分には緑青（藍銅鉱を原料とする緑色の絵具）の上から藍と藤黄を混ぜた絵具を塗りました。花の部分には鉛白を塗り、ピンク色には臙脂（昆虫の分泌物を原料とする赤色の動物性染料）を塗りました。

このように、様々な原料の絵具を使い分けることで、絵が透けることなく、幅広い色調を持った絵を描くことができます。



下絵



緑青(顔料)を塗ったところ



顔料の上に藍と藤黄を混ぜた染料を塗ったところ